特集
毛呂山人物伝

郷土が生んだ蘭方医
安藤文澤

↑安藤文澤とその家族。後列左から２人目が文澤、前列右端が長男・太郎である。明治３年ころの写真と推定。（原田雅義さん提供）

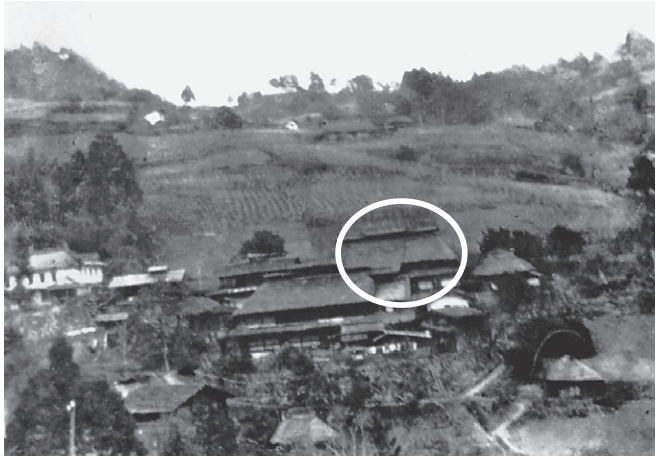
種痘の創始者
幕末から明治にかけて地域医療に貢献

幕末から明治にかけて、日本の近代化という大きな転換期のなか、史実は数々の偉業を後世に伝えています。この時代を生きた毛呂山町を代表する偉人の一人が安藤文澤です。蘭方医として、種痘を広め、地域医療の発展に大きな貢献をしました。

今回の特集では、強制種痘に心血を注いだ安藤文澤の業績にスポットをあて、その人物像に迫ります。

安藤文澤年譜（年齢は数え年）

文化4年（1807）1歳	5月25日、入間郡阿諏訪村に名主・安藤恒八の長男として生まれる
文化6年（1809）3歳	◆権田直助、毛呂本郷に生まれる
文化7年（1810）4歳	弟・東作が生まれる
文化12年（1815）9歳	◆杉田玄白『蘭学事始』をまとめる
文政7年（1824）18歳	川村碩布編『春秋稿』（俳諧選集）に称々（文澤俳号）で句を入集
文政8年（1825）19歳	番匠村（ときがわ町）の蘭方医・小室元長に入門する
天保元年（1830）24歳	鳥羽藩の江戸藩邸詰侍医となる



↑文澤生家は阿諏訪村仁谷地区にあった（昭和初期撮影）
丸印が文澤の家

当時、天然痘は死に至る病として民衆に恐れられていた難病でした。その天然痘を予防するため行われていたのが種痘です。種痘法が日本に伝わったのは、18世紀後半から19世紀初頭といわれていますが、普及には至りませんでした。嘉永2年（1849）に佐賀藩の医師とオランダ人医師によって、ようやく日本全国に種痘が普及し始めたと史実は伝えています。しかし、文澤は、その4年前には地域に種痘を行っていたといわれています。その功績をたたえ、埋葬された理性寺の案内板には「種痘の創始者」と記されています。

↑現在は文澤生誕の地として、屋敷跡に解説表示板が立てられている。

同時期に生きた郷土の偉人

同時期を生きた権田直助が日本古来の医術・古医道を極めたのに対し、海外渡来の西洋医学の道を選択した文澤。二人の間で、医学に対する議論があったかは定かではありませんが、隣村2歳違いとなれば、顔見知りの仲であったことは想像できます。どちらも幼年期より漢学や書を学び教養を身に着けたと思われますが、毛呂山町を代表する俳人・川村碩布の俳弟であった文澤は文化人としての顔も垣間見ることができます。

■種痘とは→天然痘の予防接種のことである。ワクチンをY字型の器具（二又針）に付着させて人の上腕部に刺し、円形の傷を付けて皮下に接種する。現在、天然痘ウイルスは自然界に存在しないものとされているため、1976年から日本では行われていない。

◆安藤家以外の世の動き

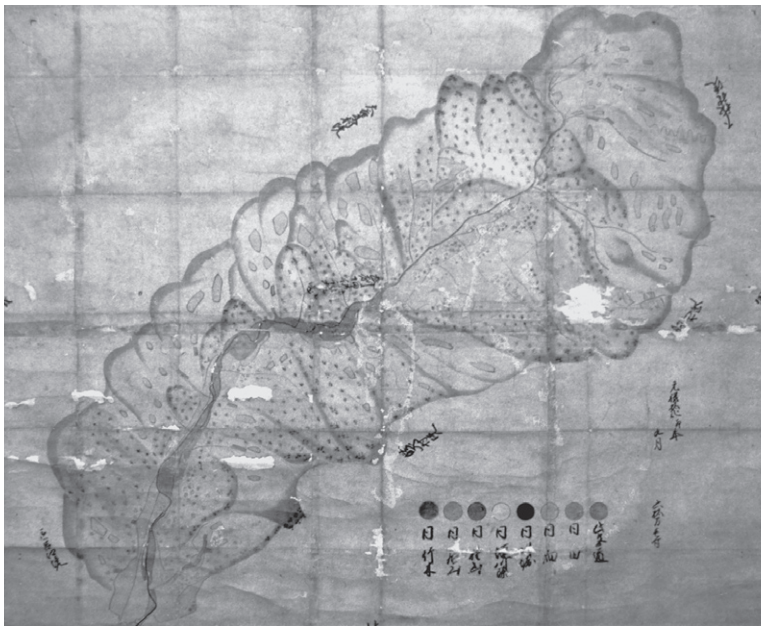
天保4年（1833）27歳		◆天保の大飢饉
天保14年（1843）37歳		◆俳諧の師・川村碩布没する
弘化2年（1845）39歳		牛痘苗が我が国に伝来するや熱心に研究に従事、弟・東作と協力して一族に種痘を施す
弘化3年（1846）40歳		長男・太郎生まれる
嘉永2年（1849）43歳		◆佐賀藩が牛痘を初めて行う
嘉永5年（1852）46歳		◆岡部均平、伊古田純道らが我が国初の帝王切開手術を行う
安政5年（1858）52歳		◆官立の種痘所が神田に設立される
慶応3年（1867）59歳		◆大政奉還 ◆坂本龍馬暗殺 ◆王政復古の大号令
明治元年（1868）62歳		◆鳥羽伏見の戦い 太郎、榎本武揚率いる幕府海軍に入り、箱館戦争に加わる
明治2年（1869）64歳		箱館戦争の囚徒たち赦免され、太郎東京に帰る
明治4年（1871）65歳		太郎、岩倉具視の米欧渡航に外務書記官として随行する
明治5年（1872）66歳		6月29日、文澤、病気のため死去、四谷大木戸の理性寺に埋葬される
明治20年（1887）没後15年		◆権田直助（79歳）没する
明治22年（1889）没後17年		弟・東作（80歳）没する
大正13年（1924）没後52年		太郎（78歳）没する
昭和15年（1940）没後68年		埼玉史談（第12巻・第2号）に初めて文澤の研究が発表される

強制種痘に力を注いだ生涯

安藤文澤は、文化4年（1807）入間郡阿諏訪村の名主を務める安藤恒八の長男として生まれました。少年期より漢学を学んだといわれていますが、当時の知識人がそうであったように俳諧にも強い関心を示しています。文政7年（1824）、俳諧の宗匠として江戸に春秋庵を開いていた川村碩布が編集した『春秋稿』に称々という俳号で句を寄せています。18歳の若さで俳諧の世界に没頭していたのです。これは、父・恒八の影響が大きかったのではないかといわれています。文澤が建てた恒八の墓石の右側面に、

『月の跡 慕ふて飛ぶや ほととぎす
八十三恒翁』と刻まれていることからも理解できます。

そのころ、医師を志した文澤は、番匠村（現ときがわ町番匠）の蘭方医小室元長に入門しています。医学を志すに至った経緯は明らかではありませんが、元長も熱心な俳諧愛好者で、川村碩布の門下であったことなどからすれば、社交と情報交換を兼ねた文学サロンを通して、医学の世界に傾倒していったとも考えられます。



←阿諏訪絵図（元禄期）
安藤一族が在住していた時期のもの
（阿諏訪区有文書）

■若き日のエピソード

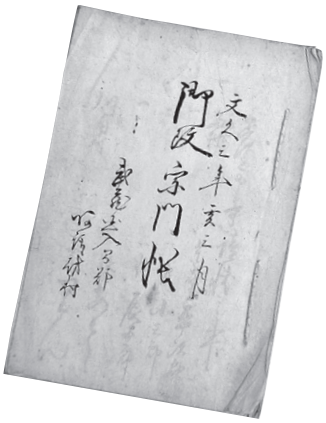
血気盛んな若き日の文澤にかかわるエピソードとして、阿諏訪の上村七郎さん（故人）が昭和52年の新聞社の取材に対して、親から聞かされた文澤の逸話として次のように答えています。「文澤さんはな、隣の家の娘をいいなずけにしていたんだがヨ。ところが、若いもんで本庄の遊郭に通い、そこで士族あがりという遊女とすっかりなじみになり、ついには別れられなくて嫁にしたんだ。もちろんいいなずけの方は破談だネ」。文澤は、遊び人気質であったようですが、一方では義侠心が強く、開明的な自由主義者で、当時の常識からはかけ離れた考えを持っていたようです。

■強制種痘を地域に普及

さらに文澤は、研鑽を積むため、有名な蘭方医を歴訪し、江戸四谷に開業するまでになりました。その名声は鳥羽藩の知るところとなり、天保元年（1830）23歳の若さで江戸藩邸詰侍医として召し抱えられました。入門者も相次ぎ、そのなかには後に御茶ノ水に順天堂病院（現順天堂大学附属病院）を開く佐藤尚中など、近代医学史にその名が輝く人物もいました。

文澤の業績として特筆すべきは、種痘の普及にあります。当時、天然痘は死に至る病として、民衆から恐れられる難病の一つでした。1796年、イギリスの医師ジェンナーが牛種痘法を発見してからほぼ半世紀後の嘉永2年（1849）、オランダからもたらされた牛種痘接種法は、その予防法として蘭方医の

←文澤両親の墓（町指定文化財）
墓の側面に『月の跡 慕ふて飛ぶや ほととぎす　八十三恒翁』と刻まれている



→阿諏訪村宗門人別帳（文久3年）
文澤の父・恒八が、文久3年5月に亡くなったことが記されている
（阿諏訪区有文書）

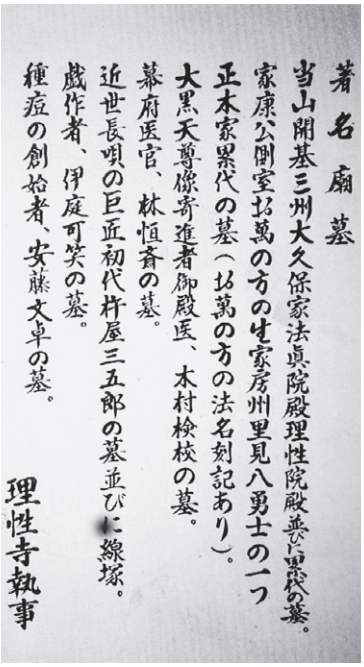
注目を浴び、安政5年（1858）幕府をして官立の種痘所を設置するに至りました。ようやく種痘が広く行われるようになりましたが、大衆のなかには西洋の魔術などと言い一向に信用しないものも多く、種痘の実施は容易でなかったといわれています。牛の体内に巣食う天然痘菌を人体に注射する方法は、免疫学が定着している現在では容易に理解できますが、当時、その仕組みを理解するまでの苦労は並大抵のものではなかったと推察されます。そこで文澤は意を決して身内や近親を説いて種痘を強行。やがて次第に成果も上がっていくようになりました。こうして文澤をはじめとする蘭方医の努力は功を奏し、法律をもって種痘を実施するまでになりました。その後天然痘は1976年に撲滅が確認されています。

■強制種痘は文澤が最初では…

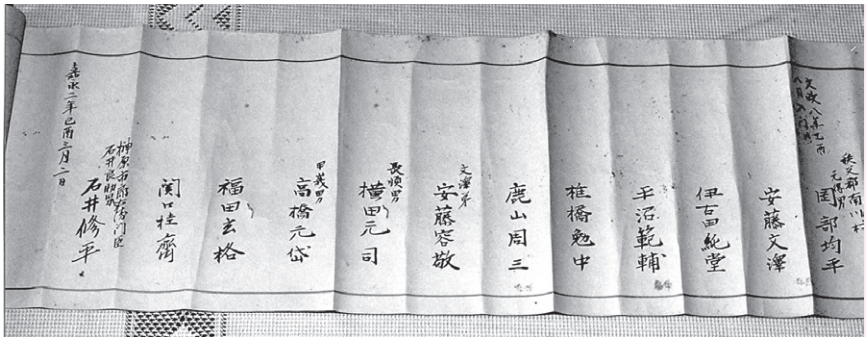
こんにち、文澤を評して種痘の創始者（開祖）と称し功績を追慕（ついぼ）しています。しかし、種痘は日本各地から伝わったとされ、だれが一番最初に種痘を成功させたのか、厳密に特定することは難しく、史実では『嘉永2年（1849）に佐賀藩の医師・楢林宗健（ならばやしそうけん）と長崎のオランダ人医師オットー・モーニッケが種痘を実施し、ようやく日本全国に種痘が普及し始める』とあります。正確な記録が残されていないため、証明することはできないようですが、弘化年間（1844～1847）に文澤が実弟と協力し、一族に種痘を施したということが、師である小室元長に宛てた書簡に記されています。いずれにしても、埼玉県地方における草創期の種痘施術は文澤最大の功績に違いありません。

種痘という画期的な治療法を地域の医療に導入し、その啓蒙に努めた文澤は、明治5年（1872）66歳で没し、医院を開業した四谷大木戸にほど近い日蓮宗理性寺（りしょうじ）に葬（ほうむ）られています。現在、この寺は杉並区西永福に移転、墓も現在の地に改葬されていますが、山門の著名廟墓（ちょめいびょうぼ）の案内板には「種痘の創始者、安藤文卓の墓」と書かれています。この「文卓」こそ、毛呂山町が生んだ偉大な蘭方医・安藤文澤なのです。

↑安藤文澤の墓（理性寺）
将棋の駒の形をした珍しい墓である
（東京都杉並区永福町）

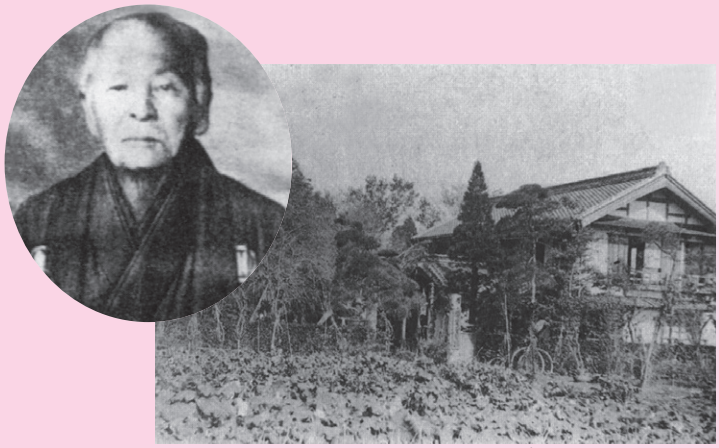


↑種痘の創始者と書かれた理性寺
「著名廟墓」の案内板



←小室元長門人帳（文政8年に入門）
文澤、弟・容敬（かたたか）（東作）の名が記され、さらに我が国初の帝王切開術を成功させた岡部均平、伊古田純道の名もある。

安藤文澤とその周辺の人びと



↑文澤の門下で川角村に順生堂病院を建てた小室潜庵（1849 ～ 1926）
写真右の順生堂病院は明治45年に建てられ、昭和初期まで開業していた。現在は住宅が建っているが、一時期、町立の保育園が開園していた。

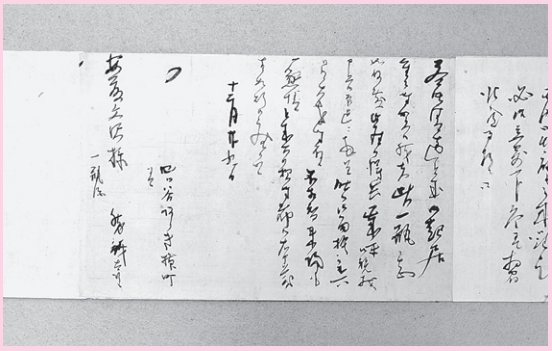
↑文澤の俳諧の師である川村碩布（1750 ～ 1843）
圭岳が描いた碩布の肖像

安藤文澤の軌跡をたどると、様ざまな人物との出会いがあります。俳諧の師である川村碩布は、郷土を代表する俳人で、武蔵野俳壇に大きく貢献し、生涯を通じて諸国を歴遊し各地に逸話を残しています。文澤は、鳥羽藩で藩医を勤めるようになっても俳諧は続けていたようです。

蘭方医の師は、番匠村の小室元長ですが、彼は、産婦人科医として地域医療に力を尽くした人物です。その門下で、我が国初の帝王切開術を成功させた岡部均平、伊古田純道は埼玉県下の名医としてその名を残しています。また、近代医学史にその名を残した順天堂を開いた佐藤泰然・尚中とも深い関係があります。佐藤尚中は、文澤の門弟でしたが、その才能を見抜いた文澤は外科医として著名であった佐藤泰然の開く和田塾で学ぶことを薦め、ついには泰然の養子となって順天堂の発展に力を尽くしたのです。

↑安藤文澤の長男・太郎（1846 ～ 1924）
岩倉具視の随員として使節団に参加したときのもの（ワシントンにて撮影）安藤記念教会蔵

身内にも優れた人物がいます。弟の東作は、江戸に出た兄の後を継いで家を守り、医を業として、兄と同様に種痘の普及に尽力した人物です。さらに長男の太郎もまた、歴史に名を残した人物です。少年時代、漢学、蘭学、英学を学んでいますが、当時最先端の学問であった英学の修養は太郎の生涯に重要な役割を果たしています。太郎は青年期に幕府海軍操練所に入り、幕府の騎兵となっていますが、このころ、坂本龍馬とも親交があったようです。また、戊辰戦争においては、幕府軍として戦い、旧幕府艦隊に加わり宮古海戦や箱館戦争に参加しています。その結果、獄につながれた身となりましたが、恩赦もあり、その才能を買われ、外務書記官として岩倉具視の使節団に選ばれています。その後は、外交官として活躍し、晩年は、日本国民禁酒同盟の初代会長として禁酒運動に情熱を注ぎました。



↑安藤文澤宛て勝海舟書簡（一部）

安藤文澤と勝海舟（新毛呂山町史「コラム」より）

文澤は幕末期の幕臣の中心人物、勝海舟や大久保一翁などと極めて親密な交際をしています。『安藤太郎文集』には勝海舟邸で文澤が海舟に酒をご馳走になった話が伝えられています。また、ときがわ町の小室家には海舟・一翁の文澤宛て書簡が現存していますが、そこには海舟がお歳暮として文澤に酒一升を送ったというものであり、文澤は海舟からお歳暮を贈られるほどの人物であったのです。

安藤文澤と権田直助

『埼玉史談』第 26 巻第１号（昭和 54 年４月１日）
小川喜内氏寄稿文より

権田直助と安藤文澤は、郷土の偉人として知られているが、両者は同じ年代を生きた人物である。２歳文澤が年上で、生家も３キロメートルの距離しか離れていなかったので、お互い顔見知りの仲であったと考えられるが、二人をつなぐ明らかな文献は見つかっていない。同じ医学の道に進みながら、対照的な道を歩んでいる。文澤は蘭方医として江戸の四谷で開業し名声を得て、鳥羽藩の藩医となったが、直助は日本古来の医道に目をむけ、古医道の世界でその名を残している。

直助は、尊王運動に力をそそぎ、「人の病は小なり、国の病は大なり、今こそ国の大患を療すべし」と医業をなげうって幕末の志士として奔走。その活躍が認められ、国学者として新政府に採用され大学校の教官となり中博士に任命されるまでになる。

一方、文澤は強制種痘に心血をそそぎ地域医療に貢献したが、幕末期、鳥羽藩に身をおいていた文澤には厳しい結果が待っていた。鳥羽伏見の戦いのとき、藩主に滔々と弁論し家中を驚嘆させたとの記録があるが、要旨は不明で、朝廷への謝罪恭順を説いたのか、幕府軍への協力を説いたのかは分かっていない。そのようななか、息子の太郎が幕府軍に身を投じ、箱館戦争に加わり敗北、投獄の身となってしまう。そのころ、文澤は浪々の身で、まもなくこの世を去っている。

維新後、直助は新政府に取り入れられたが、急速に広まった外来文化のまえに、国学が衰退し、政治の世界から姿を消してしまう。打って変わって、新政府に起用されたのが、文澤の息子太郎であった。一時追放の身だったが、語学が堪能であったことが幸いし、外務書記官として登用されたのである。なお、直助については、後に神道の普及啓発と国語学の研究に心血をそそぎ、大山阿夫利神社の神官を務めたことはよく知られている。

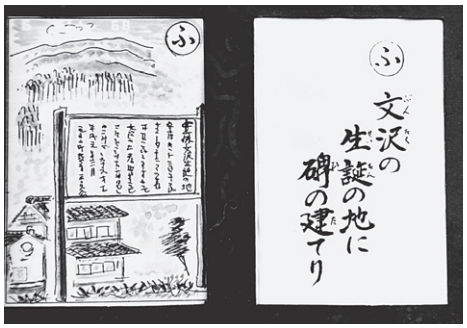
それにしても、栄枯はすこぶる劇的に両者の立場を一挽に逆転する関係にあったことは、時流とはいえ、不思議な関係であったように感じる。

■功績を後世に伝えて

強制種痘を普及させた最初の人物として歴史に名を残すことはできませんでしたが、鳥羽市では文澤が最初であると主張する郷土史家もいます。いずれにしても、正確な記録や文献が見つかっていないのも事実です。歴史に埋もれていた感のある文澤ですが、その業績が世に知れ渡ったのは、昭和15年「埼玉史談」に研究発表が掲載されてからです。

安藤文澤の郷里に住む小峰甲子夫さんは文澤の弟である東作の子孫と交流があったといいます。「東作の曾孫にあたる子たちとはよく遊びました。でも、そんなにすごい家だとは知りませんでした。文澤については、大人になって文献などで知りました」と、近所でもその偉業は伝承されていなかったようです。一族である安藤泰吉さんは、文澤家跡地の一部に居を構えていますが、５軒あった一族も今では2軒となってしまい寂しい限りだといいます。「文澤の家は跡取りがいなくて、絶えてしまって、お墓も移転してしまったけど、たまに子孫と名乗るかたが、訪ねてくることがありますよ」と残念そうに話していました。

文澤の偉業が地域にあまり伝えられていないことは残念ですが、郷土の偉人として多くの人の心にこれからもずっと刻まれることを願います。



↑『阿諏訪いろは詩』に取り上げられた文澤の句（句：小峰甲子夫さん、絵：大野孝昭さん）

資料提供（毛呂山町歴史民俗資料館）
Ｐ３安藤文澤生家写真／Ｐ４阿諏訪絵図／Ｐ４阿諏訪村宗門人別帳／Ｐ６川村碩布肖像／Ｐ６小室潜庵、順生堂病院写真／Ｐ６安藤文澤宛て勝海舟書簡

参考文献
毛呂山町史／新毛呂山町史／毛呂山町資料集【第２集】郷土が生んだ蘭方医『安藤文澤』／第５回特別展『蘭学事始』／研究紀要第２号／橿寮碩布と春秋庵をめぐる人々